

「鉄スクラップ輸出と為替レート」

—超円高下、なぜ高水準の輸出となったか—

—要 旨—

・2012年、日本の鉄スクラップ輸出量は史上第2位の860万tを記録した。しかし年平均対ドル円レートは73年2月に変動相場制になって以来の79.79円となる超円高だった。
・円高にも関わらず輸出増となったのは、輸入国が米屑価格と対比の結果、日本くずの価格優位を選択したためと推察される。
・日米国内価格差を分析すると10年初から格差が広がり、11年、12年も縮まらずに推移している。
・今後、日本のマーケットが韓国や中国から東南アジア等へ移動しても、既に米国のマーケットであることから、日本のスクラップ輸出量は常に米国との価格対比により変動していくだろう。

目 次

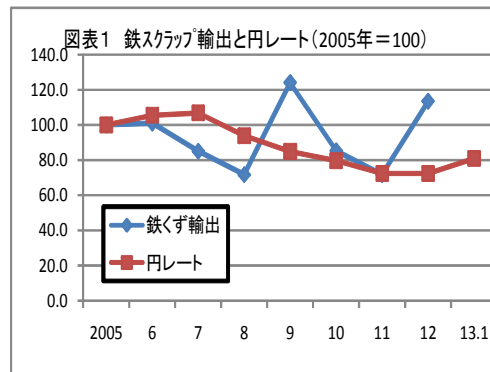
はじめに	
1. 分析の対象	1
2. 日本の輸出先	
(1)2012年の向け先	1
(2)韓国、中国における日本の位置	2
3. 米国の鉄スクラップ輸出	
(1)世界における米国の位置	4
(2)輸出向け先	4
4. 円レートと鉄スクラップ輸出	
(1)円レートの月次推移	5
(2)鉄スクラップ輸出との関係	6
5. 米屑価格との対比	6
結論	7
補足1	7
補足2	8

2013年2月28日

(株)鉄リサイクリング・リサーチ
代表取締役 林 誠一

はじめに

2012年の鉄スクラップ輸出量は、史上第2位の860万tを記録した。しかし年平均対ドル円レートは、73年2月の変動相場制移行後、最高値の79.79円だった。円高にも関わらず輸出増となったことについて、鉄スクラップ固有の特徴が存在すると捉え検証した。



備考:2013年は1月

1. 分析の対象

(1) 範囲

輸出量は通関統計を拠りどころとするが、関連する品名コードHS7204-49-900 その他くずには中国に向けられる銅付き未解体スクラップである「雑品」が含まれる。2012年は860万tのうち70万t~80万t（輸出全体の8%~9%）と推定される。国内流通も中国における処理もメルチングスクラップ（加工処理されたスクラップ）とは異なり、その挙動は主に中国の銅相場（=銅需給）や解体人件費等の動向に影響を受けている。今回分析ではその分が異質要素となる。

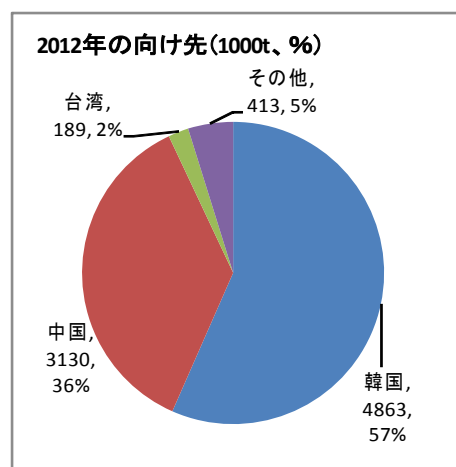
(2) 分析対象

鉄スクラップ輸出の動向は、①相手国の需給環境 ②相手国における仕入れ先としての日米価格差 ③日本は輸出側として日本の為替レート ④原料資源の一環として、世界の鉄鉱石価格やオイル価格 銑鉄輸出価格などの動向 ⑤国内鉄スクラップ需給動向 ⑥船型や配船デリバリー ⑦季節要因（年末年始、中国春節、寒波や凍結など）⑧台風や地震などの自然災害などが変動要因に挙げられよう。本件ではこのうち主要因と思われる②と③について分析対象とする。

2. 日本の輸出先

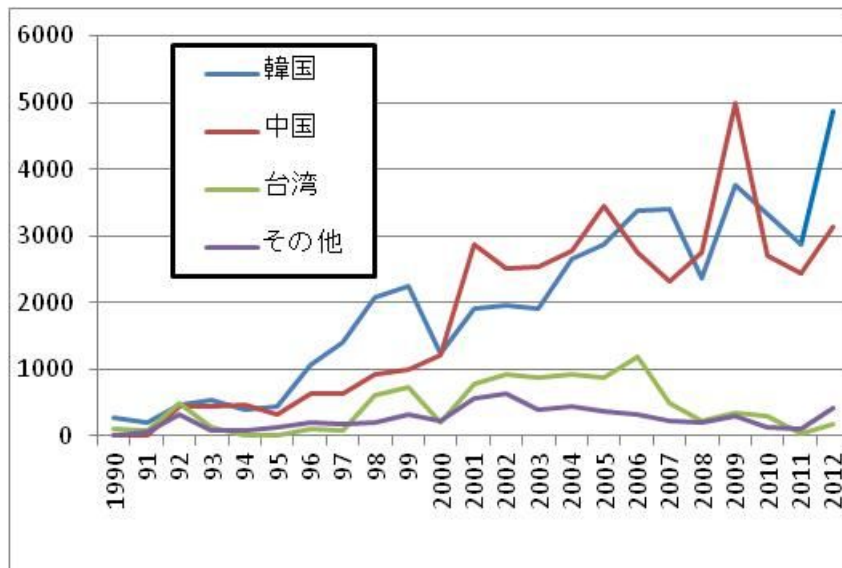
(1) 2012年の向け先

860万tの向け先は1位韓国486万t（全体の57%）、2位中国313万t（36%）等であり、近隣の韓国、中国、台湾の3カ国で95%を占める。韓国、中国が主力である。過去20年をみても1位、2位の入れ替わりはあるが2カ国が主体であって量の拡大はこの2カ国が引き上げてきている。



データ:日本鉄源協会「鉄源年報」(財務省・通関統計)

過去 20 年の日本の輸出向け先推移

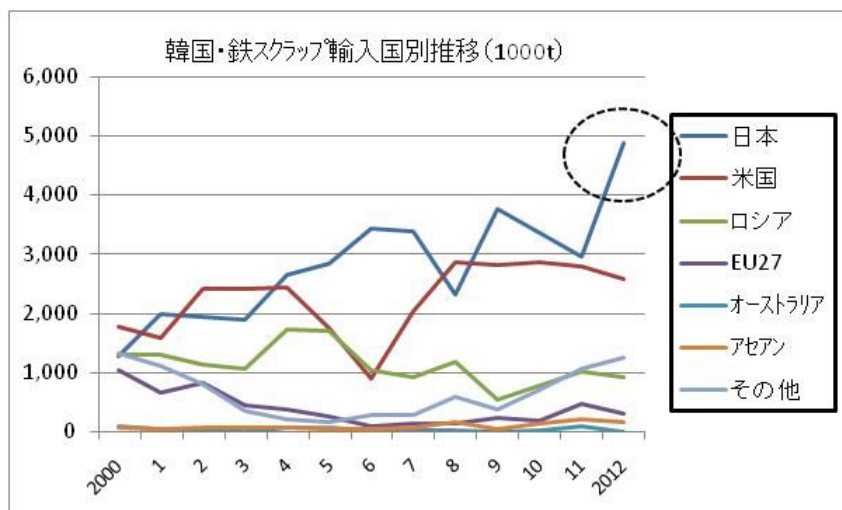
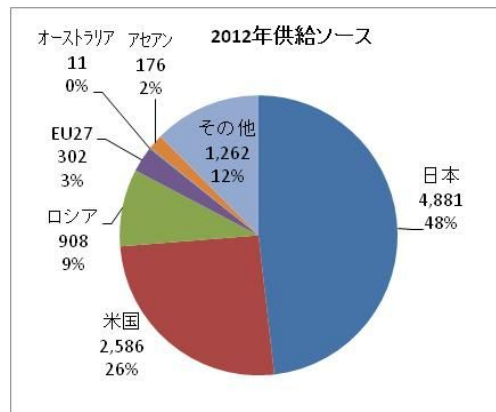


(2) 韓国、中国における日本の位置

では韓国および中国では日本はどのような位置にあるのだろうか。

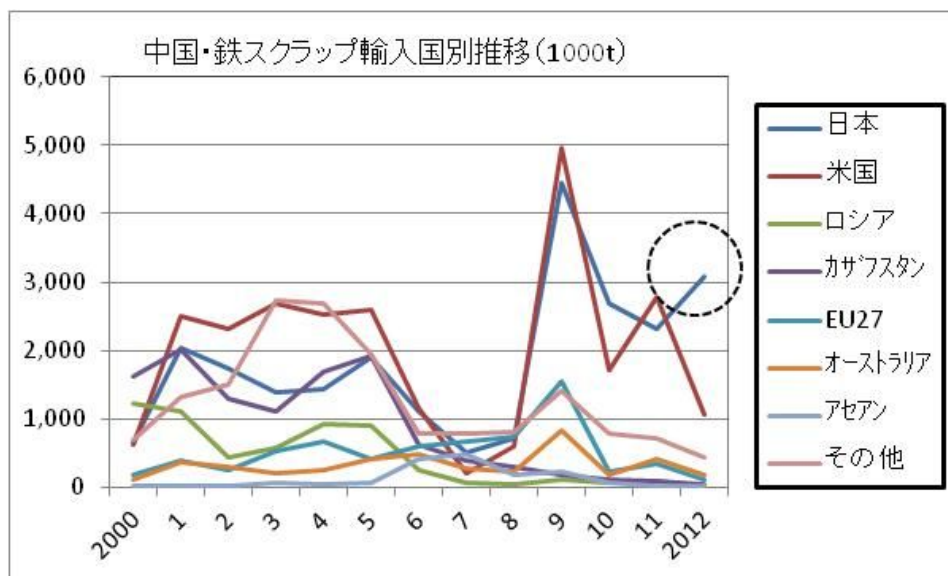
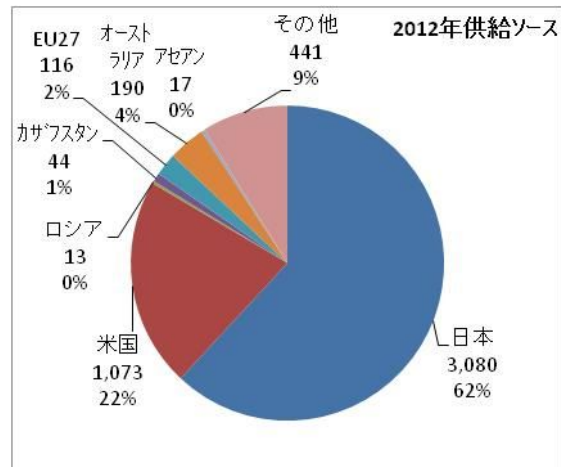
1) 韓国

2012 年韓国は世界から 1,013 万 t の鉄スクラップを輸入したが、最大供給国は日本 (488 万 t、全体の 48%) だった。次いで米国 259 万 t (同 26%)、ロシア 91 万 t (9%)、EU27 302 万 t (3%) 等である。2000 年以降の推移をみると日本と米国が 1 位、2 位を競っており、11 年はほぼ拮抗したが、12 年は大きく日本が引き離れた。



2) 中国

12年の輸入量は前年比180万t減の497万tだった。日本は308万t（全体の62%）を占め第1位である。次いで米国107万t（同22%）となっており、2カ国で84%を占める。近年の推移をみると、2007年以降、米国と拮抗を示したが12年は韓国と同様に米国が減少し、日本が大きく増加した。



3) 韓国、中国のまとめと台湾

日本は韓国、中国において大きな供給ソースとなっているが、米国と常に競争関係にあることが指摘される。選択の基準は後述するように当然のことながら両国の価格差にある。12年はまさにその結果であったといえよう。

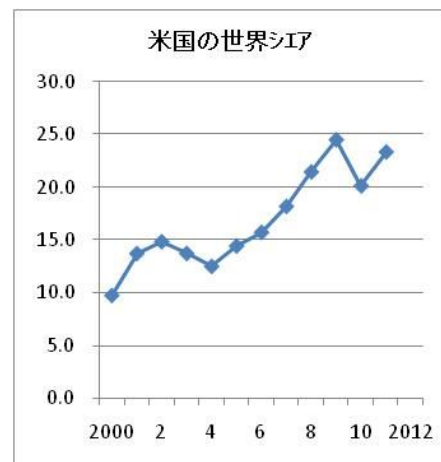
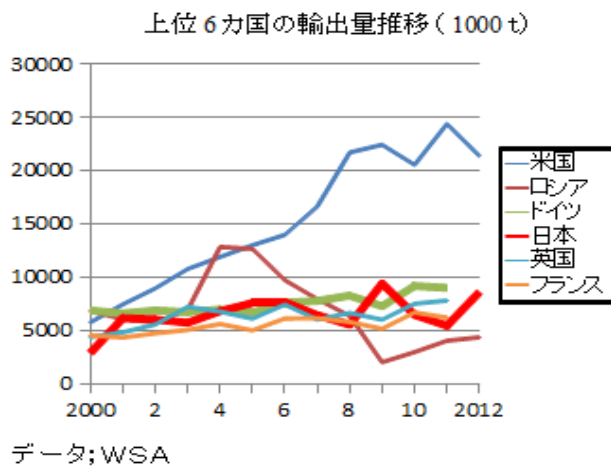
以上の結論の前に、次項で①米国の輸出向け先動向 ②円レートと日本屑輸出 ③米屑価格との関係 について分析する。

また、台湾は12年に500万t近くを世界から輸入しているが、うち日本からは15万t程度であり、米国が300万t超（輸入の6割超）の最大ソースとなっている。日本は近隣であり、かつ米屑価格よりも優位であったにも関わらず少ない。日本の鉄スクラップ輸送はバルクキャリアだが、揚港である台湾はコンテナ主体であり、これに米国が対応した。価格差よりも船型が優先したと推察される。

3. 米国の鉄スクラップ輸出

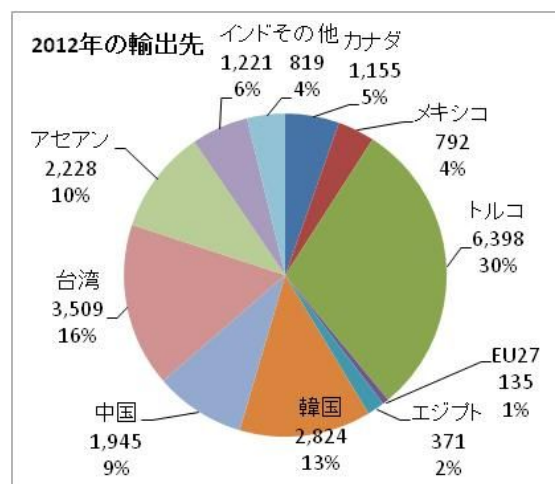
(1) 世界における米国の位置

米国は2000年代初600万t程度の輸出国だった。その後03年には1,000万t台となり08年以降は2,000万t台が5年連続で続く。12年は2,140万tを世界に輸出した。04年、05年にロシアが1,200万tの輸出を行ったことがあるが、今や2位ドイツを引き離して世界最大の供給国を維持し、かつ増大させている。その結果、世界の総輸出量に占めるシェアは、2000年初の10%弱から08年には20%に乗り、11年は23.3%を示した。供給国最大は、推定45億tの鉄鋼蓄積量とビジネスライクした姿勢があると推察される。



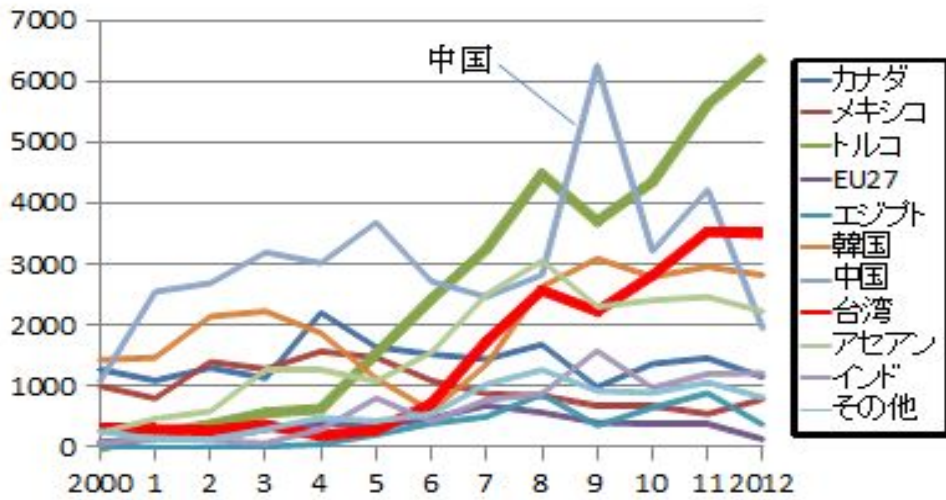
(2) 輸出向け先

トルコの鉄鋼生産が05年ごろよりキヤッチアップする前はアジアが主体だったが、今やトルコに対して640万tも輸出する主力となっている。12年の向け先は1位トルコ640万t(全体の30%)、2位台湾351万t(16%)、3位韓国282万t(13%)、4位中国195万t(9%)、5位アセアン223万t(10%)等であり、隣国はカナダ116万t(5%)、メキシコ79万t(4%)である。



2000年以降の推移をみると、東はトルコ、西は台湾が顕著に増加しており、米国にとって対トルコ商談の結果をアジアへ波及させていると読める。いずれにしても全世界に供給していることから、世界相場を形成しリードする位置にあると言える。

米国の鉄スクラップ輸出先推移(1000t)

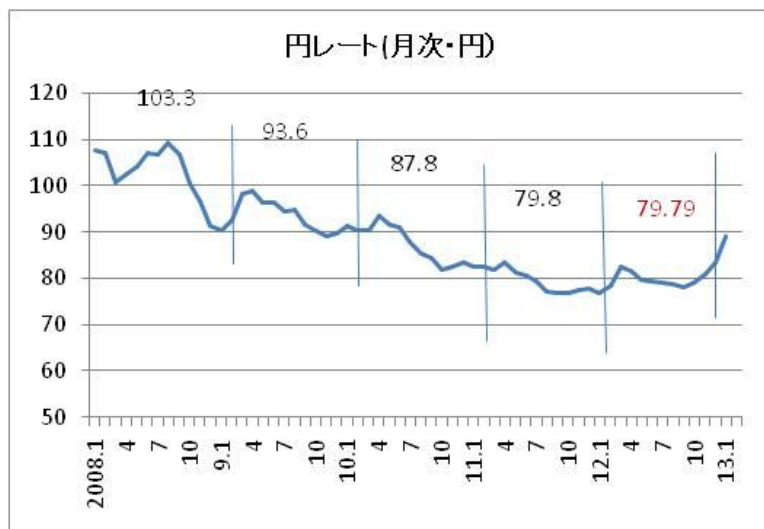


データ;日本鉄源協会「鉄源年報」

4. 円レートと鉄スクラップ輸出

(1)円レートの月次推移

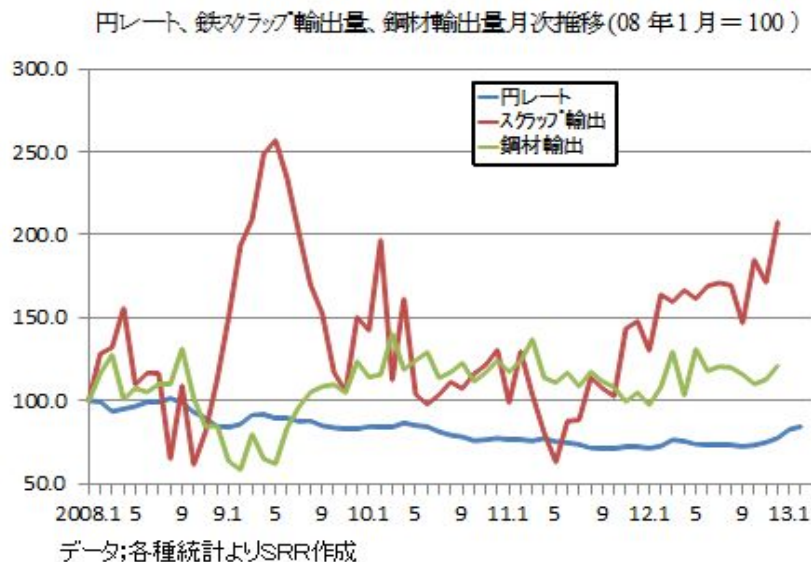
円レート年間平均をリーマン前の2008年103.3円からみると、09年93.6円、10年87.8円、11年79.8円、12年79.79円と円高で推移した。11年と12年はほぼ同じだが、月次で見ると、11年は年初82.6円は10月は76.8円まで低下し、12月は77.9円に持ち直す。続く12年は1月に77円となり3月に82.4円に取り戻すが、再び10月まで78円台が続く。12月は総選挙後の「アベノミクス」を材料にレートは円安に転換している。12月83.6円、13年1月89.2円となり、2月1日は91円前後である。しかし12年年平均79.79円は1973年2月に変動相場制に移行して以来、歴史的な円高年次だった。



(2) 鉄スクラップ輸出との関係

日本は過去94年や2000年代半にも円高を経験し、その都度、輸出産業にダメージを与え企業倒産を助長するとともに、海外移転を加速させた。12年も同種の問題を抱えた。東京商工リサーチ社による倒産企業負債総額は前年を6.7%上回る3兆8,346億円にのぼっている。こうした中、鉄スクラップ輸出に関してはレート変動に追従せず、むしろ90年代半に輸出国に転じて以来、過去2番目の高水準となった。

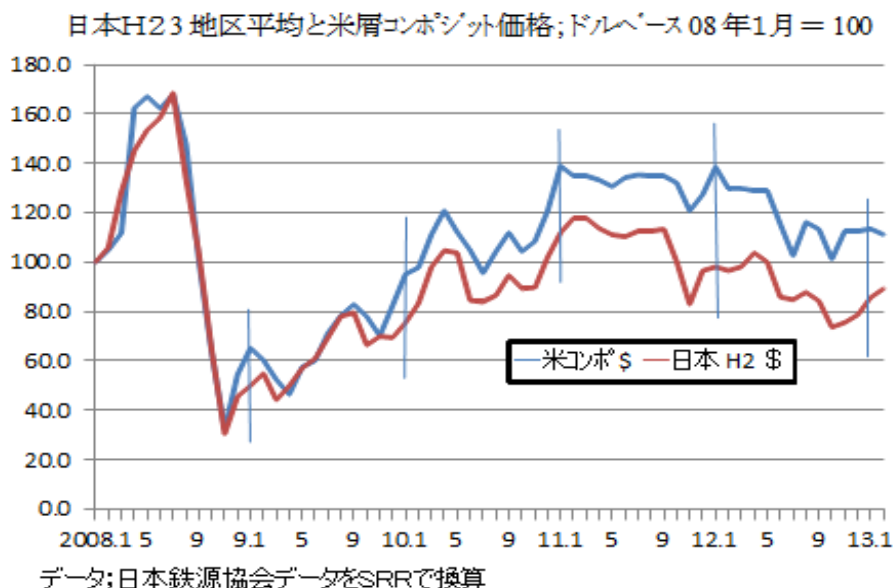
月次でその推移を鋼材輸出（普通鋼＋特殊鋼）と同一座標軸（2008年1月＝100）で検証すると、鋼材はほぼ円レートに相似して伸び悩んで経緯したが、鉄スクラップ輸出は11年5月を底に右肩上がりの増加トレンドを示した。鋼材輸出は日本鉄鋼業の競争力そのものであり、為替レートが直接的に輸出採算に影響する。レートが高まれば輸出量は減少せざるを得ない。しかし鉄スクラップ輸出はレート変動を加味してもなお増加した（＝相手国側で日本くずを選択した）。



5. 米屑価格との対比

円高にも関わらず輸出が増加したのは、日本の主力輸出先である韓国が購入するにあたって、米屑価格と比較した結果、日本くずが安価であったことが背景にある。日本屑が行かないトルコをみると米国は過去最大に輸出量を伸ばし、一方日本くずと競合する韓国や中国ではシェアを落としたことがそれを現している。仮に12年に日本がトルコへ輸出していれば（もちろんフレートの問題があるが）、米国に勝るシェアとなったかもしれない。しかしその時は世界相場はもっと早い段階で上昇に転じていただろう。東アジアが米国と共通マーケットでありかつ価格優位であったことが、日本の輸出史上第2位を招いた。また09年はリーマンショックにより鉄スクラップの世界相場が日本も米国も大きく低下しその結果、特に中国の購買力が増して日米ともに輸出が増加したと推察される。

下図は以上を検証するため、日本のH2 3地区平均炉前価格を月平均レートでドル換算し、米国コンポジット価格（ドル）と比較した。輸出にあたっては両国ともこれにフレートなどが加わるが、マクロ的に価格推移を比較するため08年1月を基準に国内価格を指数化した。08年後半のリーマンショックから09年中は両国とも価格差はあまり起きていないがその後、拡大し日本屑安値状態が続いている。



結論

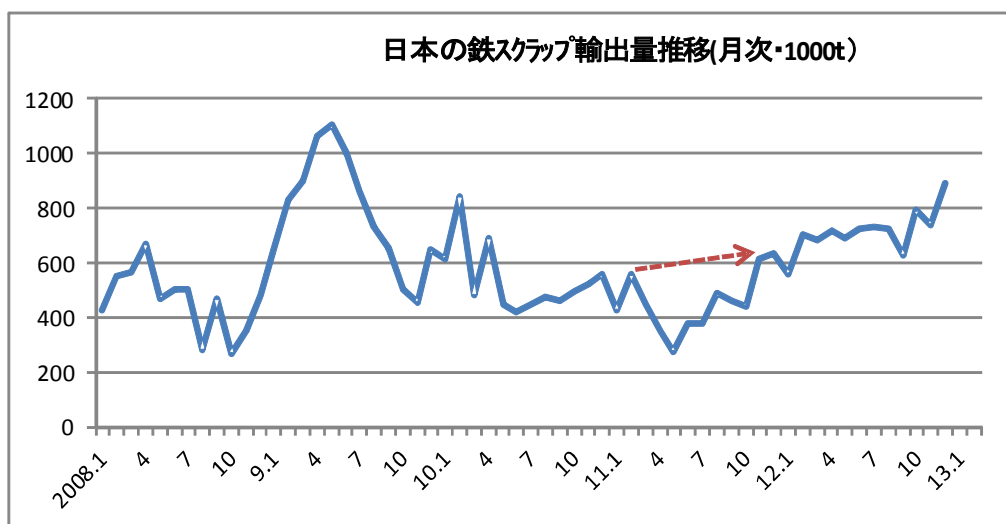
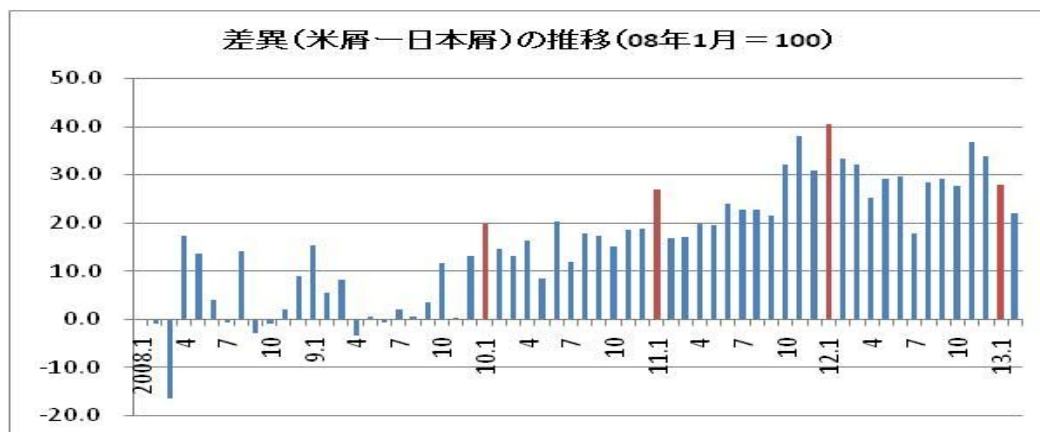
12年は歴史的円高により、輸出産業は大きな痛手を負った。鋼材輸出もその範疇にあった。しかし鉄スクラップ輸出は、高い円レートを加味しても史上第2位の高水準な輸出量を記録した。しかしそれは輸出採算を度外視して無理に輸出したわけではなく、日米共通マーケットにおいて、相手国が日本くずの価格優位性を選択した結果と検証される。

こうした日米間の価格比較による輸出量の変動は、今後日本の輸出先が韓国や中国の自給化により、東南アジア地域に移動しても同様のパターンとなるだろう。何故なら既に米国のマーケットだからである。従って日本の鉄スクラップ輸出は米屑価格の変動を無視しては進まない。

補足 1

米国国内価格との値差は10年以降拡大し、11年、12年ともほぼ同様の間隔をもって推移している。そこで日本の鉄スクラップ輸出量の月次動向との関係を検証すると、日本の輸出は10年6月を底に増加に転じた。これは10年初から米国との価格差が顕著となる時期とほぼ符号する。しかしその後、11年3月に発生した東日本大震災の影響を受

け、元に戻ったのは11月ごろからだった。特に放射能汚染の問題で出荷が停滞したことがあった。もしこの災害がなければ、日本くずは年間を通して価格優位状態であったため、輸出量は順調に拡大が続き700万t台はキープしたと推察される。



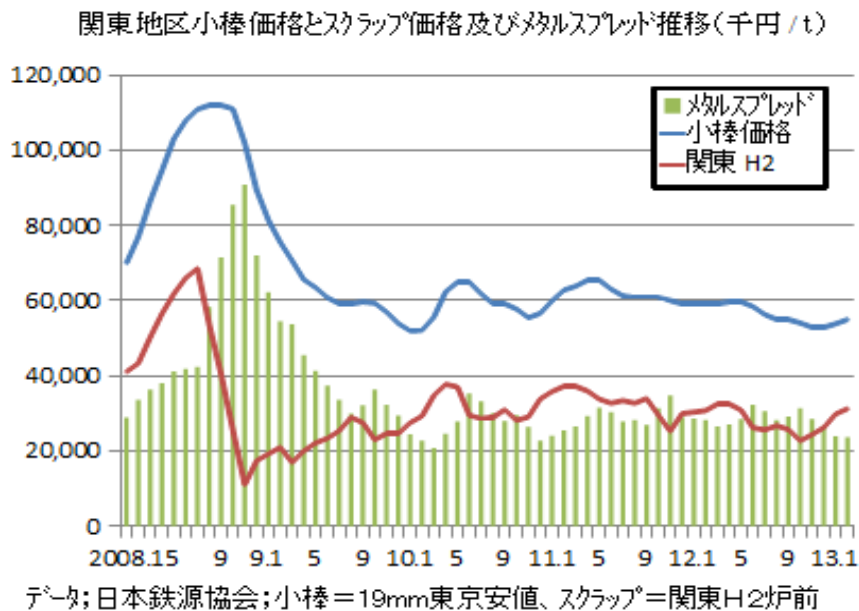
データ: 日本鉄源協会

補足2

日本のスクラップ価格が、米国内価格と比べて安価で推移しているのは、国内において鉄スクラップを主原料として生産される鋼材製品価格の低迷が続いているためである。主力製品の小棒価格はリーマンショック後低迷が続き、11年にやや持ち直したものの12年平均は56,760円/tと低迷した。鉄スクラップ価格は27,905円/tだったためメタルスプレッド（製品価格－スクラップ価格）は28,855円/tとなり、11年とほぼ横ばいだった。13年に入り価格差は更に縮小し1月は24,000円/t、2月は23,720円/tとなっている。価格差は普通鋼分野としては30,000円/tは必要としていることか

	小棒価格	関東H2炉前	メタルスプレッド [※]
2010年	58,505	31,380	27,125
2011	61,990	33,160	28,830
2012	56,760	27,905	28,855
13.1	53,889	29,875	24,014
2	55,000	31,280	23,720

ら、既に採算ラインを大きく超える。更に電力コスト値上げがこれに加わることになる。製品価格是正は電炉メーカーの存続をかける喫緊の課題であり、その如何によっては、日本の鉄リサイクル国内循環が進まないことになる。



以 上

調査レポートN018

「鉄スクラップ輸出と為替レート」

発行 2013年2月28日

発行者 (株)鉄リサイクリング・リサーチ 林 誠一

<http://srr.air-nifty.com/home/> e-mail s.r.r@cpost.plala.or.jp